



2023 慶應義塾

サステナビリティレポート



Keio University

Tokyo, Japan



慶應義塾は持続可能な開発目標 (SDGs) を支援しています。

「人身の安楽」と「人心の高尚」とを求める学塾

— サステナブルな社会を目指す —

「文明とは人の身を安楽にして心を高尚にするを云うなり」—慶應義塾の創立者、福澤諭吉が、その著『文明論之概略』においてこのように「文明」を定義づけた時、彼の眼には確かに19世紀末の西洋で著しく進歩する機械の発明と技術革新が映っていました。「蒸汽船車、電信、郵便、印刷」の4つの発明が、西洋における歴史の原動力として人心を一新してきたことを看破した福澤はその限りで、それらの文明の利器の日本への熱心な導入者であったのです。

しかし、福澤はまた、技術や制度は文明の外形や有様に過ぎず、そこに人の心身における「安楽」と「品位」の進歩が伴って初めて文明の世が到来すると述べました。そして、この安楽と品位とは、智(Intellect)と徳(Moral)によって与えられるものであり、文明とは、とどのつまり智・徳の進歩である、と彼は断言します。ただし、人類社会は未だその段階に達していないとする福澤にとって、文明とは常に到達するその先の目標であり理想であったことに注意する必要があります。

戦争による世界情勢の混沌、気候変動による災害の増加など、今、世界はめまぐるしく変転しています。サステナブルな社会を目指すためには、変化を柔軟に受け止め、課題を解決するための智と徳の拡充も常に求められています。

かつて「人身の安楽」と「人心の高尚」を目指した福澤が、その門下生に対し、「気品の泉源、智徳の模範」たらんことを求めた学塾の理念と伝統とが、今も変わらず慶應義塾の道標となっているのです。



福澤諭吉



福澤諭吉筆「慶應義塾の目的」(1896〔明治29〕年)

目次

1 はじめに	2 SDG Initiatives at Keio University	3 塾長メッセージ	4 Policy (ポリシー)	5 Environment (環境・資源保護)	9 DEI (協生環境)	13 Health&Well-being (健康・福祉)	15 Student Conference (塾生会議)	17 Keio SDGs News
--------	--------------------------------------	-----------	--------------------	----------------------------	-----------------	---------------------------------	---------------------------------	-------------------

SDG Initiatives at Keio University

慶應義塾がSDGsへの取り組みで目指すこと

慶應義塾は、創立者福澤諭吉の「実学の精神^{※1}」を基盤とし、総合大学としての強みである分野横断的アプローチにより、教育・研究・医療を通じた社会へのさらなる貢献を目指しています。

※1 実証的に真理を解明し問題を解決していく科学的な姿勢が、義塾伝統の「実学の精神」です。

慶應義塾におけるSDGs

持続可能な開発目標(SDGs: Sustainable Development Goals)とは、2015年9月の国連サミットで採択された17の国際目標(ゴール)です。2030年までに、発展途上国と先進国双方が持続可能でよりよい世界を目指すための普遍的な目標で、「地球上の誰一人取り残さない」を理念として掲げ、貧困、不平等、気候変動、環境問題、平和と繁栄、正義などに関する17の目標と、169のターゲットから構成されています。慶應義塾も、大学病院を有する教育・研究機関として、世界と地域社会に貢献する研究大学として、SDGsに関連する様々な取り組みを行っています。

慶應SDGsロゴ



慶應義塾は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています。



サステナブルな社会を目指す事業計画

慶應義塾は中期計画2022-2026において、中期的視点を持って実行していくべき重要な項目を取り上げています。そこにはSDGsの目標とする理念とも通底した、環境計画、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン(DEI)などの実践と慶應義塾における一層の定着を目標とした計画も掲げられています。中期計画をもとにして作成された年次計画のうち、サステナビリティを目指す活動に特化した項目をまとめた年次報告書が「慶應義塾サステナビリティレポート」です。

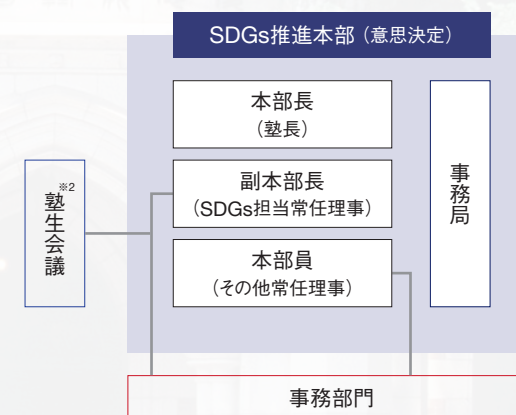
本報告書に示される成果や進捗により、サステナビリティに関わる事業計画の進捗を数値的・定性的に見える化し、

学内において必要な取り組み、今後力を入れるべきことは何かを検証するPDCAサイクルの一環としたいと考えています。また、本報告書を通して、慶應義塾のサステナビリティを目指す取り組みへの理解、協力を得ながら、様々な連携を試み、一朝一夕には解決し得ない地球全体の課題について、取り組んでいきたいと考えています。



中期計画2022-2026

慶應義塾のSDGs推進体制



※2 塾生とは、慶應義塾で学ぶ在学生のことを示します。

持続可能な社会の実現を目指して

慶應義塾は、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標SDGsに向けて、さらには2030年より先のBeyond SDGsを見据えて、2023年度も取り組んできました。

具体的な取り組みの一つとして、まず、塾生の声を慶應義塾のSDGsの施策につなげる塾生会議の活動があげられます。塾生会議は、大学生にとって身近な問題から世界の課題まで、専門家や教職員、一貫教育校の児童・生徒等、幅広い年齢層や異なったバックグラウンドを持つ人々の中で話し合いながら、自分たちに何ができるかを考え、実現につなげることを目的としています。特徴的なのは、「塾生会議」の参加を志願した塾生だけではなく、ランダムに選ばれた塾生も参加する仕組みです。これまで問題意識を持っていなかった塾生もSDGsへの課題を意識するようになります。さらには、施策を実現するために、教職員、地域や企業の方々と議論を重ねることにより、大学全体のみならず慶應義塾に関わる人々にSDGsへの意識が広がっていく実感があります。塾生会議は、現時点では実現が不可能なことでも、未来を見据えて長期的に社会を変革する糸口を見つけるための、学びの場となっているのです。

環境保全に関しては、企業と協力して「社中協力×カーボンニュートラル計画」を立ち上げました。家庭で生み出される自家消費電力分の「環境価値」を慶應に寄付する取り組みを通じて、慶應義塾に関わる一人ひとりがカーボンニュートラルへの意識を高め、取り組むことができる仕組みです。また、プラスチックごみ削減の取り組みとして

ウォーターサーバーの各キャンパス設置を実現しています。

協生環境への整備や意識の高まりも加速しています。ワーク・ライフ・バランスを実現できる塾内環境の向上に向け、女性教員のエンパワメントとリーダーシップの促進を目的としたメンタリング・プログラムの実施や、子育て支援等の総合的プログラムの導入、授乳・搾乳室の整備を行いました。また、障害者支援の活動では「@easeサポーター」とよばれる学生サポーターによる情報保障や、移動に困難のある人などの支援活動に加え、2023年度には「キャンパス・バリアフリー探検隊」を編成し、塾生と障害のある方が共にキャンパス内を巡りながらバリア（社会的障壁）を調査・発見し、誰もが過ごしやすいバリアフリーなキャンパスをつくるための提言を行いました。こうした活動を通じて、誰もが活躍できる環境づくりを目指しています。

地域とのつながりにおいては、「慶應義塾大学日吉子ども食堂」で、地域の子どもたちと塾生が「食」について考えました。また、慶應義塾が所有する森で一貫教育校の生徒が地域の人から森について学ぶ活動も継続的に行われています。その他、国内外でのワークショップ、シンポジウム、市民講座において、ウェルビーイングなどのSDGsにつながる議論を積極的に行っています。

このような日々の活動を通じて、今後も慶應義塾に関わる全ての人々と一緒に、身近な問題から世界の課題まで、幅広く目を向けながら、継続的に取り組んでいきたいと考えています。



塾長

伊藤 公平

慶應義塾のサステナビリティ・ポリシー

慶應義塾ではサステナビリティを目指す取り組みを推進するため、

「慶應義塾協生環境推進憲章」、「慶應義塾環境理念」を掲げ、それらに基づいた各方針を定めています。

また、SDGsのゴール8「働きがいも経済成長も」への取り組みの一環として、採用ページに雇用に関する各方針を掲載しています。

慶應義塾 協生環境推進憲章

(2019年9月20日制定)

- 1 自他の尊厳に等しく敬意を払い、互いの人格を尊重し、協力し合う協生社会の実現を目指します。
- 2 多様な価値観への理解を深め、自分らしく生きることへの共感と配慮を育む啓発活動を推進します。
- 3 社会的障壁を取り除くことに努め、個々の選択に応じた生き方を実現できる環境を整備します。

男女共同参画基本理念

<https://www.diversity.keio.ac.jp/wlb/philosophy.html>

ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン(DEI)の推進に関する基本方針

<https://www.diversity.keio.ac.jp/diversity/policy.html>

障害^{※3}のある学生の支援のための基本方針

<https://www.diversity.keio.ac.jp/ease/policy.html>

ハラスメントについて 慶應義塾の基本方針

<http://www.harass-pco.keio.ac.jp/guideline.html>

慶應義塾大学病院 多様性を尊重するための基本方針

<https://www.hosp.keio.ac.jp/about/policy/diversity.html>

一般選抜 特別な配慮について

<https://www.keio.ac.jp/ja/admissions/special-provision/>

慶應義塾 環境理念

(2012年7月6日策定)

慶應義塾は教育・研究・医療における活動において、地球環境の保全と持続可能な循環型社会の発展に貢献します。また、教職員、塾生のひとりひとりが、地球生態系の一員であることの自覚と責任を持って、環境改善活動を推進します。

慶應義塾研究倫理要綱

<https://www.research.keio.ac.jp/forms/files/f02-01.pdf>

雇用に関する方針

慶應義塾にとって「人」は何よりの財産です。慶應義塾で働く一人ひとりが豊かな人生を送り、それが持続可能であることを目指しています。そのために、職場環境の整備、健康と安全の確保、人材育成、能動的な働きを創出する人事制度や労働慣行に関する取り組みを実施しています。

慶應義塾職員採用ページ

<https://www.hrm.keio.ac.jp/docs/index.html>

※3 慶應義塾では、「障害者権利条約」および「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」の趣旨にある、「障害は人ではなく社会の側にあり、その「社会的障壁」を取り除くことが、私達の責務である。」という考え方に立つ「社会モデル」を大切に考えています。そのため、「障害」は社会や環境の側にあるということをより意識する観点から「障害」の表記を用いています。

カーボンニュートラルの取り組み



慶應義塾全体のカーボンニュートラルに向けて

慶應義塾は2030年に電気使用量の全てを自然エネルギーに転換することを目指します。

慶應義塾大学には6つのキャンパスがあり、大学病院や一貫教育校も含めると、それぞれのエネルギー使用量、使用形態、オンサイト太陽光発電のポテンシャルなどの条件は大きく異なります。これらのキャンパスの特徴も勘案して、カーボンニュートラルに向けた具体的な検討を行っています。

▶ 2023年度に開始した取り組み

●カーボンニュートラル都市ガス(CN都市ガス)の導入

東京ガス株式会社とCN都市ガスの供給に関する基本合意書を締結し、2023年11月より、湘南藤沢キャンパスで使用する都市ガスの全量をCN都市ガスに切り替えました。CN都市ガス導入によるCO₂排出削減貢献量は約1,400t-CO₂/年で、これは湘南藤沢キャンパスにおける年間CO₂排出量の約39%に相当し、2030年を目標年として推進している湘南藤沢キャンパスのカーボンニュートラル化の実現に貢献します。また、導入開始に伴い、「カーボンニュートラルLNGバイヤーズアライアンス」に加盟しました。慶應義塾のカーボンニュートラルに対する取り組みが広く周知されるとともに、加盟している大学・企業などと情報交換することで、持続可能なキャンパスの実現を目指します。

●「社中協力×カーボンニュートラル計画」の立ち上げ

2022年に東京電力ホールディングス株式会社と締結した連携協定に基づき、2024年1月に、慶應義塾関係者(塾員^{※4}・教職員など)の家庭で生み出された「環境価値」^{※5}を結集して慶應義塾のカーボン・オフセット^{※6}に活用する取り組みとして「社中協力×カーボンニュートラル計画」を立ち上げました。具体的には、東京電力エナジーパートナー株式会社が設置した関東エリアのご家庭の太陽光発電設備で発電した電力のうち、ご家庭において使用された自家消費電力分の「環境価値」を慶應義塾に寄付することで、慶應義塾のカーボンニュートラルに貢献する取り組みです。

「社中協力×カーボンニュートラル計画」Webサイト <https://www.tepco.co.jp/ep/kurashi/denka/keio.html>

※4 塾員とは、慶應義塾大学の卒業生のことを示します。

※5 電気や熱などエネルギーそのものの価値とは別に、地球温暖化への一因とされている二酸化炭素の放出がない、という「付加価値」のこと。この環境価値を慶應義塾が取得することにより、その環境価値分の二酸化炭素排出量を削減したことになり、省エネなどのエネルギー削減の努力に加えて、慶應義塾のカーボンニュートラルを加速化することができます。

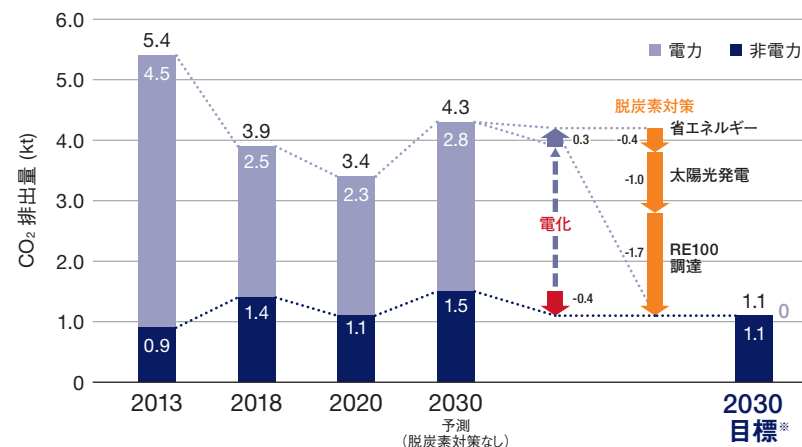
※6 市民、企業、NPO/NGO、自治体、政府等の社会の構成員が、自らの温室効果ガスの排出を認識し、主体的にこれを削減する努力を行うとともに、削減が困難な部分の排出量について、他の場所で実現した温室効果ガスの排出削減・吸収量等(クレジット)を購入すること又は他の場所で排出削減・吸収を実現するプロジェクトや活動を実施すること等により、その排出量の全部又は一部を埋め合わせるという考え方。(農林水産省ホームページ「カーボン・オフセット」より)

<https://www.maff.go.jp/j/kanbo/kankyo/seisaku/climate/jcredit/offset/carbonoffset.html>

湘南藤沢キャンパス(SFC)におけるカーボンニュートラル

湘南藤沢キャンパスでは、慶應義塾全体のカーボンニュートラルに向けたモデルキャンパスとして、自然エネルギー電力への転換を実現するロードマップを作成しました。2030年を目標年として、照明器具のLED化、節電の徹底、建築物の省エネ性能の向上などによる省エネルギー、太陽光発電を中心とした再生可能エネルギーの導入、Renewable Energy 100%(RE100)電力の調達などによって電気使用量の全てを自然エネルギーに転換します。キャンパスにおけるオンサイト太陽光発電のポテンシャル評価を行った結果、建物の屋上やカーポートの屋根などに太陽光パネルを設置することで、約30%のエネルギーを自給可能であることがわかりました。SFCでは、エネルギー自給率向上のため、地域バイオマス資源の発電利用のポテンシャル調査なども計画しています。また、カーボンニュートラルに関連する生物多様性や資源循環などの環境問題についても統合的に取り組んでいきます。

SFCのカーボンニュートラルへ向けたロードマップ



環境・資源保護の取り組み



「生物多様性のための30by30アライアンス」に加盟

「30by30アライアンス」とは、ネイチャーポジティブ^{※7}実現に向けて、2030年までに陸と海の30%以上を健全な生態系として効果的に保全しようとする目標です。

30by30達成に向けた取り組みをオールジャパンで進めるため、環境省が発足した「生物多様性のための30by30アライアンス」(<https://policies.env.go.jp/nature/biodiversity/30by30alliance/>)に、慶應義塾も2023年5月に加盟しました。

生物多様性モニタリングを実施し、エビデンスに基づいた自然保護を実践していきます。



みなさんmiraiプロジェクト

「みなさんmiraiプロジェクト」は、最大規模の慶應の森がある南三陸町(宮城県)において、南三陸「で」「から」「と」学ぶ、すなわち、震災を乗り越えて様々な問題に立ち向かっている現地の方々から学び、さらに日本・世界へと視野を広げて、未来に活かす知見を現地の方と交換する、学びの循環をつくらうとする取り組みです。研究領域・所属キャンパスの垣根を超え、多様な学生や教員が参加しています。

9月8～10日に、第一期生による合宿を行いました。塾生20名と代表の経済学部 津田眞弓教授を中心とした教職員7名が、山主として南三陸町の木材の世界的FSC認証にも関わっている慶應の森を軸に、町のバイオマス構想・木材(南三陸杉)・漁業(養殖)・防災(避難所運営)と、南三陸町の方々の試みや経験を学びました。

シンポジウム「海と陸の豊かさー地球環境を考えるー」開催

自然科学研究教育センターは、地球環境を研究している4名の研究者を招き、2023年12月2日にシンポジウム「海と陸の豊かさー地球環境を考えるー」を開催しました。シンポジウムでは、神奈川県三浦半島にある小網代の谷(浦の川流域)での保全活動の現状や課題、海洋プラスチック研究、安定同位体分子の計測による環境理解、環境問題における国際法の役割について、それぞれの研究者が講演した後、質疑討論が行われました。



受水槽を木槽に更新

志木高等学校の受水槽を木槽に更新しました。木製の受水槽は、耐久性・耐震性・抗菌性に優れているだけでなく、製造過程でもCO₂排出量が非常に少ないことで地球温暖化防止に伴う温室効果ガスの削減に結びつき、環境性にも優れています。また、木槽材は基本的に自然木と付属品の鋼材に大きく2種類に分類することができ、経過年数により解体更新した木部はウッドチップなどに再利用したり、鋼材なども再形成して新たな製品として利用することもできるなど、各部材のリサイクル性も高い特徴があります。

今回更新した受水槽は、キャンパスのある埼玉県産の杉を使用することで、「地産地消」にも貢献しています。



「サステナブルキャンパスプログラム」始動

慶應義塾湘南藤沢キャンパス(SFC)は、SFCの全ての部門(総合政策学部、環境情報学部、看護医療学部、政策・メディア研究科、健康マネジメント研究科、湘南藤沢中部・高等部)が協働してサステナブルなキャンパスの実現を目指す、「サステナブルキャンパスプログラム」を始動しました。プログラムでは、それぞれ「資源循環」「自然環境」「カーボンニュートラル」「健康と地域」「食と農」をテーマとする5つのプロジェクトと、湘南藤沢高等部で取り組まれてきた環境プロジェクトが、相互に連携しながら進められています。



2023年度に実施した主な活動例

- 古紙回収の開始、学内カフェでのリターナブル容器の導入
- キャンパス内の生物モニタリングと侵略的外来種の除去
- 営農型太陽光発電のSFC内外への導入可能性の検討
- 株式会社スタジオスポビー(<https://spoby.jp/index.html>)が開発したエコライフアプリ「SPOBY」を用いた行動変容実験
- 遠藤・御所見地区における米と野菜の生産
- 活動をまとめた冊子の作成

^{※7} 日本語で「自然再興」といい、「自然を回復軌道に乗せるため、生物多様性の損失を止め、反転させる」ことを指します。
(環境省ホームページ <https://www.env.go.jp/guide/info/ecojin/eye/20240214.html>より)

環境・資源保護の取り組み



「慶應義塾中等部×KeMCo 物質循環ワークショップ」開催



慶應義塾中等部と慶應義塾ミュージアム・コモンズ(KeMCo)は、2022年度から協同して、SDGs13番目のゴール「気候変動に具体的な対策を」を主題としたプロジェクトを展開しています。2023年度はアートとテクノロジーを切り口に様々なワークショップを実施しました。2023年9月12日には、アート・プロジェクトとして「土づくり」を実践されているメディア・アーティストの三原聡一郎さんを講師として迎え、「アーティストのまなざしを通じて生態系や循環について考えるプログラム」を実施しました。「身の回りのもので筆記具をつくる」をテーマに、廃棄物を再利用して、インクや筆の製作を行い、それらを使用して書道を体験しました。制作した作品は、KeMCoで開催された、新春展2024「龍の翔る空」展(2024年1月10日～2月9日)にて展示されました。

2023年度に実施したその他のワークショップ

<https://studio.kemco.keio.ac.jp/chutobu>

- ・「都市の生き物図鑑」ものづくりワークショップ
- ・航空業界における気候変動への取り組みを知る、プログラミングワークショップ
- ・SDGs×Museum:ミュージアム体験を通じた行動宣言・動画制作ワークショップ



オープンセミナー

「ブルーテックが変える日本の海」開催

2024年2月29日、新川崎先端研究教育連携スクエアと川崎市経済労働局は、オープンセミナー「ブルーテックが変える日本の海」を開催しました。ブルーテックとは、Blue Technologyの略称で、海洋分野での先端デジタル技術のことです。

海水温の変動とそれに伴う漁獲量の変化、「海の森」と言われる藻場が消失する磯焼けなど、問題が顕在化している中、海洋分野はデジタル化やIoT化が最も遅れていると言われており、ブルーテックの推進による課題解決やビジネス創出への期待が高まっています。

セミナーでは、ブルーテックに取り組む研究・実務の第一人者を招き、その取り組みの紹介や座談会を実施しました。



小泉信三記念講座※8

「カーボンニュートラル世代のサステナブル経営

ー地域と大学の未来を見据えてー」開催

2023年11月9日、2023年度の小泉信三記念講座として、政策・メディア研究科 吉高まり非常勤講師(三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社フェロー(サステナビリティ)、東京大学教養学部客員教授を兼任)による講演「カーボンニュートラル世代のサステナブル経営ー地域と大学の未来を見据えてー」が開催されました。

地球が抱えている気候変動や生物多様性喪失に対応する世界と日本の動向を踏まえた、高まる金融の役割、ESG投資やサステナブルファイナンスの基礎となる企業の非財務情報開示など、企業に求められるサステナブル経営のあり方について説明がありました。

また、2023年に閣議決定された「グリーンTRANSフォーメーション(GX)実現に向けた基本方針」を巡る地域での事例も紹介しつつ、GXにおいて大学に期待される役割と、カーボンニュートラルを実現するサステナブルな社会とはどのようなものかの提言もありました。



エシカル消費に対応した「環境に優しいあか牛」の

生産と産学官金の生産者支援を開始

メディアデザイン研究科は、熊本県畜産農業協同組合連合会、株式会社グローバル・クラウドファンディングと共に、2023年1月16日に「南阿蘇村 草原再生・あか牛復興プロジェクト」を熊本県南阿蘇村で発足しました。そのプロジェクトの一環として、熊本県下の生産農家と協力し、牛由来メタンガス発生抑制が見込まれる「ルミナップ」を与えた環境に優しいあか牛の生産を開始しました。

また、新たな販路の創出に向けて、エシカルな取り組みにチャレンジする生産農家の直接支援と、ソーシャルインパクトを目指す、投資型クラウドファンディングも開始しました。これにより、企業や消費者が生産の段階から産地を応援し、あか牛を購入することが可能になります。

本プロジェクトは、新たな価値観であるエシカルなあか牛の生産を資金面から支援しつつ、購入体制の強化を通じた安定的供給を確立することで、持続可能な畜産業と肉食文化の維持を目指す事を目的としています。

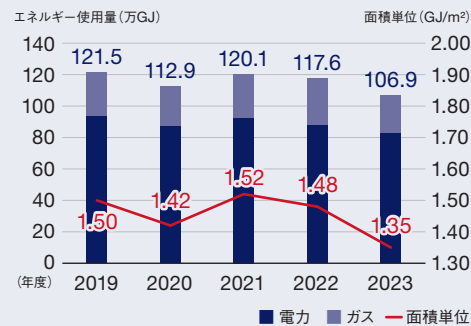
※8 故小泉信三博士の人と学問を記念して設けられた小泉基金により、全学的な総合講座として1968年より年に数回実施している公開講座。原則として予約は不要、聴講料無料で学外の方も参加可能です。



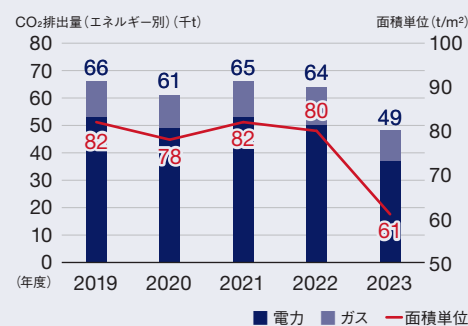
Environment 環境・資源保護

| DATA | 環境負荷データ

エネルギー使用量

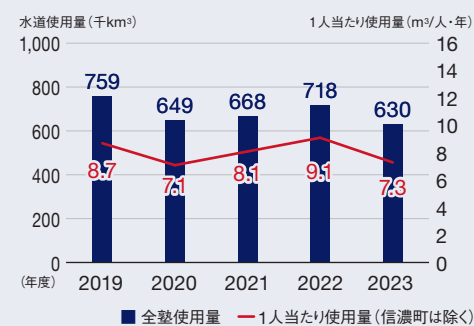


直近一年の変化 | 評価 😊

CO₂排出量

直近一年の変化 | 評価 😊

水道使用量

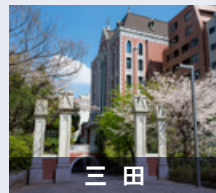


直近一年の変化 | 評価 😊

廃棄物発生量と再利用率



直近一年の変化 | 評価 😊

各キャンパスの
環境負荷データ
(2023年度)

	三田	日吉	信濃町	矢上	湘南藤沢	芝共立	一貫教育校
CO ₂ 排出量 (CO ₂ -t)	3,846	7,291	25,452	7,667	2,708	1,799	1,796
エネルギー使用量 (GJ)	84,111	158,954	555,692	168,546	65,446	39,497	38,942
電気使用量 (千kWh)	7,219	13,769	42,915	17,098	5,809	3,873	3,552
ガス使用量 (千m)	483	889	4,109	463	339	134	183
水道使用量 (千m)	45	125	290	65	38	16	52
廃棄物発生量 (t)	176.3	588.3	1,862.7	266.6	189.0	150.2	—
廃棄物再利用率	55.4%	38.7%	68.1%	40.9%	22.5%	35.0%	—

協生環境



協生環境推進室



慶應義塾は、教職員・学生・生徒・児童が、互いの人格を尊重し、多様な価値観を認め協力して生きるための環境の構築と多様性の受容に関する課題に迅速に対処するため、2018年4月1日に「協生環境推進室」を設置しました。また、2019年9月には「慶應義塾協生環境推進憲章」を制定し、「年齢・性別・SOGI(性的指向・性自認)・障害・文化・国籍・人種・信条・ライフスタイルなど、様々な背景を有する人々が、誰一人として社会から孤立したり排除されたりすることなく、互いの尊厳を尊重し合う社会」の実現を宣言し、様々な背景をもつ人々が互いに尊重・協力しあう協生社会の実現を目指しています。この宣言の実現に向け、協生環境推進室では、多様な価値観を共有・発信するプラットフォームを基盤に、慶應義塾がこれまで培ってきた知見を共有しながら、ワーク・ライフ・バランス、バリアフリー、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン(DEI)の事業推進やこれらの理念を尊重する環境や制度の整備など、一貫教育校から大学・大学院、大学病院までを包含した全塾的な取り組みを推進しています。

「独立自尊」・「他尊」のキャンパスを目指して

〔 私たちが考える協生環境とは 〕

異なる価値観に敬意を払い、互いの尊厳を認め合いながら、
社会的固定観念と心身の制約を乗り越え、
一人ひとりが自分の選択に応じた生き方を実現できる社会

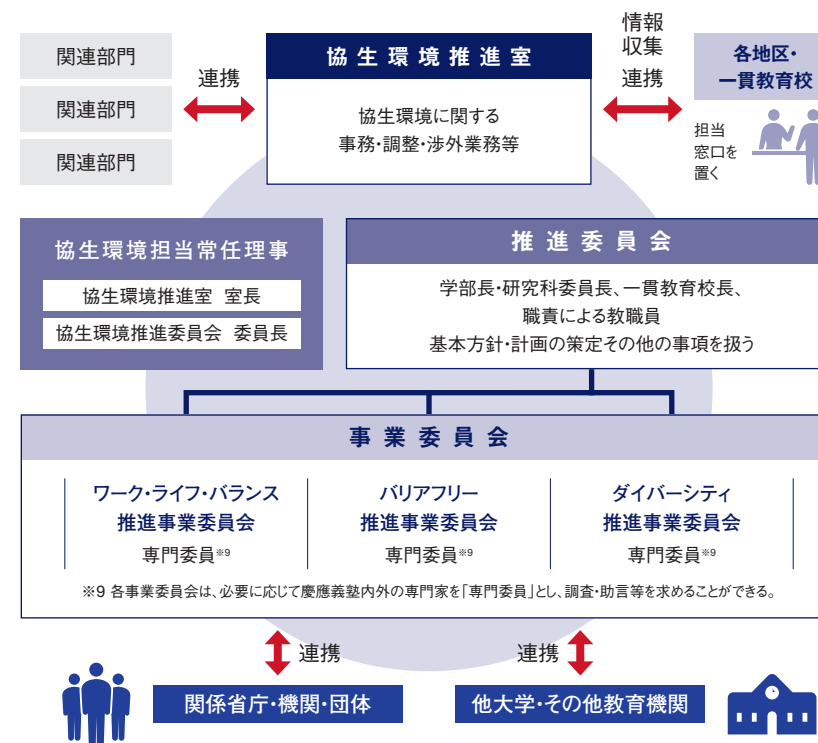
〔 協生環境に込められたメッセージ 〕

異なる価値観への理解、互いの人格を尊重する姿勢、
そして何より自分らしく生きることへの共感と配慮

ダイバーシティを受容・推進できる組織こそ発展・成長できる

体制図

協生環境推進室は、担当常任理事の下に推進委員会を設け、その下で3つの事業委員会が活動を行っています。



協生環境推進室Webサイト

<https://www.diversity.keio.ac.jp/index.html>



| 2023年度 |

協生環境の取り組み



「慶應義塾育児支援プログラム(KIDS) for Students」開始

2020年より提供している、研究・教育・診療に携わる教職員の仕事と子育てとの両立を支援する「慶應義塾育児支援プログラムKIDS(Keio Infant Daycare Support)」の対象を、2023年度から慶應義塾の学部および大学院で学ぶ塾生にも広げ、「慶應義塾育児支援プログラム(KIDS) for Students」を開始しました。慶應義塾大学の授業に出席する時間(通学時間含む)にベビーシッターサービスを利用した塾生に、一日当たり最大4,400円の補助金額を支給しています。



「大学におけるDiversity Equity and Inclusion (DEI) の課題—多様な経験から学び、共通の

目標を達成するために」国際シンポジウム開催

2023年6月12日、三田キャンパス北館ホールにて、協生環境推進室主催のシンポジウムを開催しました。理工学部 小原京子教授がモデレーターを務めたディスカッションでは、APWiL (Asia Pacific Women in Leadership) のメンタリング・プログラムに取り組む各国の大学の研究者と慶應義塾大学の女性研究者による活発な議論が交わされました。



メンタリング・プログラムを正式プログラムとして始動、塾生にも拡大

慶應義塾の女性教員のエンパワメントとリーダーシップの促進を目的に、2022年度にパイロット版として実施されたメンタリング・プログラムを、2023年度から正式なプログラムとして始動しました。2023年度は、18組のメンターとメンティーのペア合計36名の女性教員が参加し、一年間を通してリーダーシップやエンパワメント等、それぞれのテーマについて学び合いました。プログラムの一環として行われた中間報告会では、同時にワークショップを開催しました。第1回は、スポーツ心理学者のシステムデザイン・マネジメント研究科 田中ウルヴェ京特任准教授による、「心の整えかた」に関するストレスコーピングへの気づきと理解を深めるワークショップを実施しました。第2回は、体育研究所 板垣悦子教授による、ボディコンディショニングのワークショップとして、ピラティスの実技体験や呼吸法のレクチャーを受けました。

さらに、2023年10月からは、「慶應義塾大学 塾生メンタリング・プログラム」の第1期が開始しました。慶應義塾の半学半教の精神のもと、塾生(メンティー)と社会で活躍する塾員(メンター)が交流し、協生環境の学びを深め、視野を広げることで、卒業後のライフプランについて考える機会となることを目的としています。プログラムは1対1ではなく、様々な学部にも所属する学生と多彩な職場で活躍する塾員で構成されたグループごとに実施しています。



教員メンタリング・プログラム 修了式



塾生メンタリング・プログラム 中間報告会

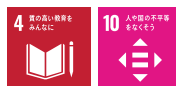
| 2023年度 |

協生環境の取り組み



プロジェクト「キャンパス・バリアフリー探検隊

～協生環境の実現をめざして～」実施



2023年10月から2024年3月にかけて、プロジェクト「キャンパス・バリアフリー探検隊～協生環境の実現をめざして～」を実施しました。

このプロジェクトは、障害当事者と一緒に実際にキャンパスを巡りながら調査し、障害学生等の修学の妨げとなっているキャンパス内でのバリア(社会的障壁)を発見し、誰もが過ごしやすい、バリアフリーなキャンパスをつくるための提言を行うことを目的としています。

参加者は、まず2023年10月16日に事前研修として、DET(障害平等研修)を受講しました。障害平等研修フォーラムから障害当事者ファシリテーターをお招きし、ワークショップを通して、「障害の社会モデル」の考え方を学びました。

2023年12月には、三田・日吉・矢上キャンパスの調査を実施しました。実際に車いすに乗りながらキャンパス内を移動したり、弱視を体験できる眼鏡をかけながらキャンパス内を移動したりすることで、授業だけでなく、休み時間や課外活動を含めたキャンパスライフ全般を想定し、何が社会的障壁となるかを確認しました。

2024年3月14日の最終報告会では、障害の社会モデルの視点から現在のキャンパスを見直し、義塾全体として実現していくべきことを塾生が提言しました。

ハード面(施設面でのバリア)だけでなく、ソフト面(啓発活動、情報発信の方法など)についての解決策も提言され、実現可能性の高いアイデアが多く生み出されました。



卒業式・学位授与式・入学式における

「@easeサポーター」の活躍



日吉記念館にて開催された、2022年度大学卒業式、大学院学位授与式、2023年度大学入学式、大学院入学式において、障害学生を支援する塾生スタッフである、「@easeサポーター」が、情報保障^{※10}の役割や介助が必要な方のサポートなどを担いました。

「@easeサポーター」は、主に慶應義塾に在籍している障害のある学生の支援や、バリアフリーに関する活動を行っている有償の塾生スタッフの総称で、専門の研修や訓練を受けています。

式典の情報保障では、場内スクリーンとYouTube配信の字幕の送り出しを行いました。字幕の送り出しは、captiOnline^{※11}という、筑波技術大学で開発された遠隔文字通訳システムを用い、登壇者の発言内容をリアルタイムで画面上に字幕として表出しました。

また、招待塾員^{※12}等で介助が必要な方のサポートなども行い、大変好評でした。



※10 聴覚や視覚などに障害のある人の「健常者と同じような情報が得られない」という困りごとに対し、手話・文字情報・ICT技術などを用い、本来得られるべき情報を保障することをいいます。

※11 筑波技術大学産業技術学部産業情報学科の若月大輔教授が開発した遠隔文字通訳システム。

※12 卒業式には卒業25年を迎える卒業生を、入学式には卒業50年を迎える卒業生を招待しています。

| DATA | 女性が占める割合

志願者数

(一般選抜 / 各年度4月1日時点)



[直近一年の変化 | 評価 😊]

入学許可者数

(一般選抜 / 各年度4月1日時点)



[直近一年の変化 | 評価 😊]

卒業生数

(全学部 / 各年度実績)



[直近一年の変化 | 評価 😊]

教員数

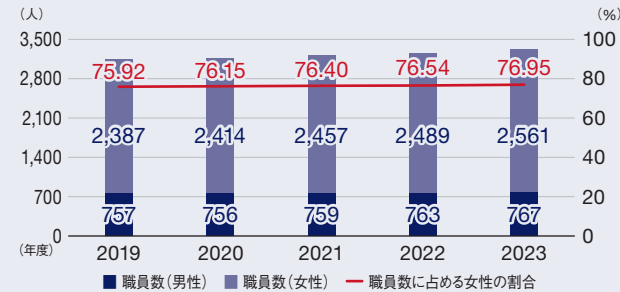
(常勤 / 各年度5月1日時点)



[直近一年の変化 | 評価 😞]

職員数

(常勤 / 各年度5月1日時点)



[直近一年の変化 | 評価 😊]

健康・福祉の取り組み



慶應義塾大学日吉子ども食堂を開催

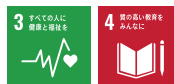


2023年5月20日、昨年12月に引き続いて2回目の試みとなる慶應義塾大学日吉子ども食堂を開催しました。本企画は、慶應義塾大学日吉キャンパスにおける様々な社会貢献に関わるプロジェクトの中の、地域との交流実現に向けた取り組みの一つとして実施されているものです。公認学生団体である「スローフードクラブ」に所属する学生が中心となって、慶應義塾におけるSDGs達成や地域と大学の関わりを深めるための取り組みの一つとして具現化し、日吉キャンパスの学生食堂「グリーンズマルシェ」の協力のもと、日吉キャンパス教職員と共に企画・運営しています。

今回は日吉キャンパス周辺にある5つの小学校から47名の小学生が参加しました。「食えることってなんだろう?～慶應生とロコモコを食べて栄養バランスについて学ぼう～」と題して、参加者と大学生と一緒にクイズや食事を楽しみながら、食べ物の栄養バランスについて考え、話し合い、食べることの重要性についての理解を深めました。



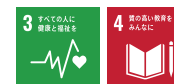
市民公開講座「一人ひとりの人生と共に歩む予防医療を～予防医療のアップデート～」開催



2024年1月21日、薬学部は、第3回がんプロフェッショナル研修会 市民公開講座「一人ひとりの人生と共に歩む予防医療を～予防医療のアップデート～」を開催しました。

講座はオンデマンド配信され、2023年に拡張移転した慶應義塾大学病院予防医療センターのプロジェクトの紹介などを通して、「健康格差」を生まないための予防医療への理解を深めました。

市民公開シンポジウム「再生医療の今、そして未来」開催



2023年10月14日、慶應義塾大学病院臨床研究推進センターは、市民公開シンポジウム「再生医療の今、そして未来」を開催しました。

再生医療等製品は、有効な治療方法が存在しない難病を治療できる可能性が期待されており、日本でも多くの研究者が実用化に向けた臨床試験や病院体制の整備等を進めています。慶應義塾大学病院でも、iPS細胞を用いた臨床試験の実施や再生医療等製品の原料として必要な細胞を製薬企業等へ安定的に供給するための仕組みづくりに取り組んでいます。本シンポジウムでは、第一線で活躍している研究者を招き、最新の再生医療についての講演と、慶應義塾大学病院での取り組みを紹介しました。

第17回桜スポーツフェスタを開催



2024年3月16日、桜スポーツフェスタがコロナ禍を経て5年ぶりに対面で開催されました。

本イベントは、「地域と学生の交流」をテーマに、下田地区で活動する体育会5部(野球部・蹴球部・サッカー部・ホッケー部・ソフトテニス部)の部員が中心となり、日頃の感謝を込めて自主的に企画・運営を行うイベントです。慶應義塾体育会が地域の方々にとってより身近な存在となるよう、体育会ならではの「スポーツ」という切り口から両者の交流を深め、協力的かつ継続的な関係を築くことを目的としています。

当日は、子どもからお年寄りまでスポーツの楽しさを実感できる「シモリンピック」や各部の体験教室、地域の方々によるステージイベントなどを実施し、大変な賑わいでした。



藤沢市と地域保健活動推進に関する協定を締結



慶應義塾大学看護医療学部と藤沢市は、地域保健活動の推進に向けて継続的に連携を図るため、2023年4月1日付で協定を締結しました。

地域の健康課題に関する研究に取り組むほか、地域保健の効果的な活動に向けて、データ分析に基づく課題の抽出と活動計画の立案を行えるよう協働します。さらに、藤沢市に所属する保健師等の人材育成においては、やりがいを持って活動できるよう、キャリアラダーに応じた現任教育を行います。これらの連携により、持続可能かつ地域の特性を活かした健康なまちづくりの推進を目指します。

健康・福祉の取り組み



RENKEI※13 ヘルス・ワークショップに参加



2024年3月18～20日、イギリスのサウサンプトン大学の主催で開催されたRENKEI(日英知識経済イニシアチブ研究教育ネットワーク)によるヘルス・ワークショップに、土屋大洋常任理事と大学院政策・メディア研究科博士課程の塾生が参加しました。

3日間にわたるワークショップでは、日英両国のRENKEI加盟大学から集まった様々な分野の研究者がグループにわかれ、特に高齢化に着目して、関連する各自の研究内容を発表しました。健康寿命を延ばし、健康的な社会を構築していくうえでの課題解決に向けて、日英の研究者がどのように連携しうるかについて、活発に議論を交わしました。



写真提供:サウサンプトン大学、redManhattan Photography

藤沢市民講座開催



2023年11～12月、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス(SFC)と藤沢市は、藤沢市民講座(生涯教育講座)を開催しました。計3回の講座を通じて、藤沢市の明るい未来を築いていくための手立てについて議論するとともに、近年、地域づくりのキーワードとして注目されているウェルビーイング(Well-being)への理解を深めました。

- 第1回「健康で生き活きと働くために:ワーク・エンゲイジメントに注目して」
- 第2回「健幸(ウェルビーイング)でいるためのコミュニティを考える」
- 第3回「みんなで築く元気なまち ～アクティブリビング&ウェルビーイング～」

※13 日本とイギリスの大学が、双方のナレッジの共有や国際共同研究を円滑に創出するためのパートナーシップ。加盟大学は、慶應義塾大学、九州大学、東北大学、立命館大学、大阪大学、エディンバラ大学、サウサンプトン大学、ダラム大学、ニューカッスル大学、リーズ大学、リバプール大学。
(<https://www.britishcouncil.jp/programmes/higher-education/university-industry-partnership/renkei/about>)

「第4回 KEIO SPORTS SDGs シンポジウム

2024」開催



2024年3月9日、「第4回 KEIO SPORTS SDGs シンポジウム2024」を開催しました。2023年度のKEIO SPORTS SDGsの進捗報告、具体的取り組みの共有を行うとともに、『パブリックヘルスの視点から見るスポーツSDGs』、『慶應義塾とスポーツSDGs』という2つのセッションを通じてKEIO SPORTS SDGsの新コンセプトを共有し、持続可能なスポーツの新たな価値について考え、多様なステークホルダーとの連携を深めました。本シンポジウムには200名以上の申し込みがあり、セッションの討論では、参加者からの質問を取り上げながらモデレーターと演者との間で活発なディスカッションが行われました。

KEIO SPORTS SDGs: <https://sportssdgs.keio.ac.jp/>



講演ごとに皆で立ち上がって拍手し、座位ブレイク(座りっぱなしを中断)している様子

シンポジウム「BLS (Basic Life Support)

教育の実践と社会的意義」開催



2024年3月2日、慶應義塾一貫教育校BLS委員会と慶應義塾大学スポーツ医学研究センターは、シンポジウム「BLS(Basic Life Support)教育の実践と社会的意義」を開催しました。BLSとは、心肺停止または呼吸停止に対してAED(自動体外式除細動器)以外の特殊な医療器具を使用しないで行う一次救命処置のことです。慶應義塾の一貫教育校では、2002年よりBLSの体系的な教育を開始し、小学校から高校の各段階で、心肺蘇生法、AEDの操作方法等の実習を行っています。本シンポジウムでは、教育現場におけるBLS教育のさらなる幅広い浸透を目指し、慶應義塾におけるBLS教育の紹介とBLS教育の意義について講演やパネルディスカッションを行いました。

塾生会議



塾生会議

「塾生会議」は、フランスやイギリスで行われている気候変動対策や温室効果ガス削減対策を国民の側から提言する会議にヒントを得て、慶應義塾SDGsの一環として、学生の意見を本学のSDGsの取り組みに反映させるために発足しました。

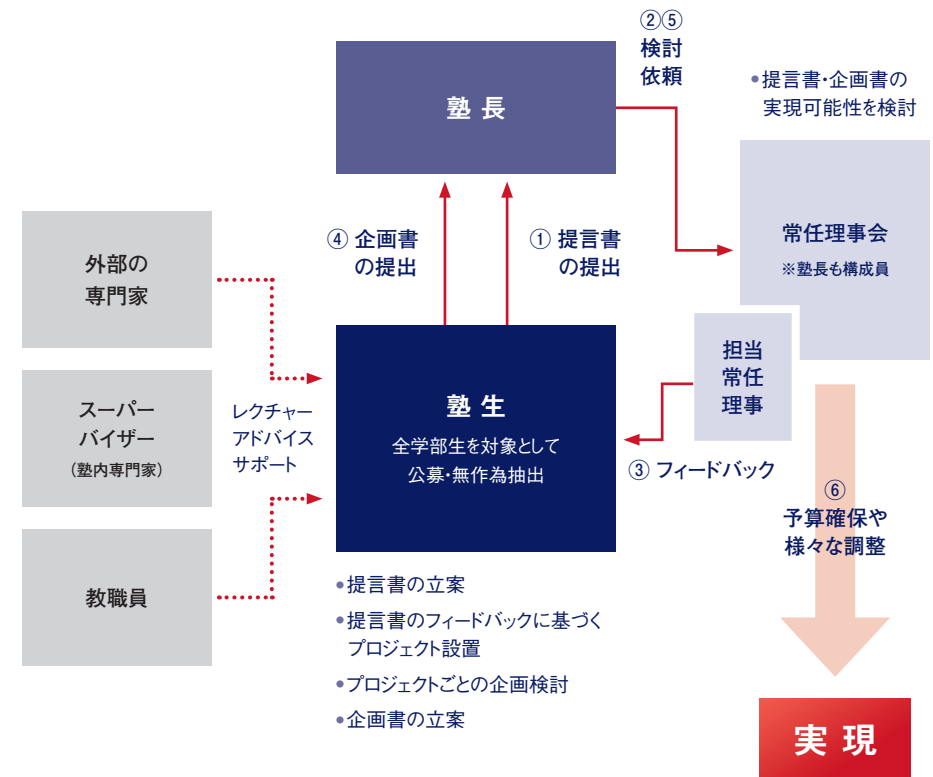
大学の全学部から公募と無作為抽出で選抜された塾生が、専門家のアドバイスを受けながらディスカッションを重ね、SDGsを実現するための慶應義塾のビジョン・目標・ターゲットを提言することを目的として、2022年6月から活動を開始しています。

夏には、塾生会議のメンバーに加え、慶應義塾の一貫教育校の児童・生徒、メンバー以外の大学生の希望者の総勢約100名が参加する「慶應義塾SDGs会議－サマー・キャンプー」を開催し、年齢を超えてSDGsについて議論しています。

塾生会議が1年間の活動を通じて取りまとめた17のゴールを踏まえた提言は、最終提言発表会で塾長に直接提出され、塾長と参加学生の間でさらに踏み込んだ意見交換が行われます。提出された提言については、塾長を中心に検討・議論され、慶應義塾の取り組みや次年度の塾生会議の活動につなげられています。



体制図



| 2023年度 | 塾生会議の活動

塾生会議プロジェクト始動

「2022塾生会議」の提言を受けて7つのプロジェクトが採択され、2023年度に具体的な取り組みを実施しました。

そのうち3つのプロジェクトを紹介します。

- ウォーターサーバープロジェクト

「2030年までに、ウォーターサーバーをキャンパス内の全ての施設に設置する」という提言を受けて、2023年度より、各キャンパスにウォーターサーバーを設置あるいは試行設置し、地球環境との「協生」へ向けた動きをスタートさせました。2023年10月には、「日常生活において、「マイボトル」を携帯し、授業の合間にウォーターサーバーで給水する行動を習慣化しよう!」という目標を達成するために、塾生会議のメンバーや有志の塾生とともに「スタンブラリー」を企画・実施しました。企画の一つとして行われたマイボトルの配布には、多くの塾生が列をつくりました。



- 慶應の森プロジェクト

慶應義塾が保有する森林に関する情報の収集と公開を実施し、慶應の森の周知と森林の利活用を目指すプロジェクトです。慶應の森の自然共生サイト^{※14}への認定を見据えて、生物多様性保全や温室効果ガス削減等の社会貢献事業の実践も目指します。2024年1月に南三陸の志津川山林、2024年3月に三重県の志木の森深山で、森林のCO₂吸収量を測定する現地調査を実施しました。今後は、自然共生サイトへの認定と、本プロジェクトや保有林の情報を積極的に外部に発信することで、全国的に30by30目標そのものの認知度を高め、ネイチャーポジティブに貢献することを目指しています。

- ごみ箱改革プロジェクト

塾内のリサイクル率の改善を目指すプロジェクトです。曖昧な分別表示、利用しづらい不統一なごみ箱のデザイン、分別に対する意識の低さなどに着目したうえで、利用者である塾生や教職員向けにアンケートを実施し、改善に向けた要望などを調べました。それらの結果を踏まえ、2024年3月、日吉キャンパスに古紙回収ボックスとごみ分別を啓発するための看板を設置しました。今後は他のキャンパスでの設置を目指しています。



国連大学サステナビリティ高等研究所

(UNU-IAS) 開催のシンポジウムに塾生

会議のメンバーが登壇

2024年3月29日、「国連大学SDG大学連携プラットフォーム(SDG-UP)」(<https://ias.unu.edu/jp/sdg-up>)の参加大学とサステナビリティの取り組みについて議論を行うシンポジウムが、国連大学サステナビリティ高等研究所(UNU-IAS)により開催され、SDGsの達成に向けた学生主導の取り組みに関するパネルディスカッションに、塾生会議のメンバーが登壇しました。塾生会議の概要について紹介した後、「2023塾生会議」が行った最終提言のうち、①地方出身学生支援のためのイベント「よる食堂」の開催、②教科書の電子化・サブスクリプションの導入について発表しました。

企業から参加したアドバイザーからの助言や、参加者からの質疑を受け、活発な議論が交わされました。



※14 「民間の取組等によって生物多様性の保全が図られている区域」を国が認定する区域。
(環境省ホームページ <https://policies.env.go.jp/nature/biodiversity/30by30alliance/kyousei/>)

Keio SDGs News

「ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン (DEI)」
Webサイトを開設



2023塾生会議ガイダンス実施

3大学連続ワークショップ
「ウクライナ復興そして未来を考える」
第1回開催@上智大学



Keio STAR開設



慶應義塾

悩みと仕事の両立支援プログラム (CARE) 開始



「慶應義塾SDGs会議-2023サマー・キャンパー」開催

3大学連続ワークショップ

「ウクライナ復興そして未来を考える」第2回開催@東北大学

志木高等学校

志木の森ツアー(夏)開催



2023年
4月

5月

6月

7月

8月

9月

Pickup

| 6月 |

THE Impact Rankings 2023に慶應義塾大学が
SDGs3つのゴールで世界100位以内にランクイン



国際連合が提唱するSDGsの達成度により社会に対する大学の貢献度(インパクト)を測定することを目的とした世界大学ランキングTHE Impact Rankings 2023において、慶應義塾大学は3つのゴールで、世界100位以内の順位を獲得しました。5回目となる2023版には、世界112の国や地域から1,591機関(大学)が参加しました。



海の豊かさを守ろう
77位



平和と公正をすべての人に
32位



陸の豊かさを守ろう
86位

| 6月25~27日 |

伊藤塾長がAPRU学長会議に参加、
Steering Committeeメンバーに就任決定



香港大学で開催されたAPRU(The Association of Pacific Rim Universities:環太平洋大学協会)第27回年次学長会議のパネルディスカッション"Our Planet, Our Future(私たちの地球、私たちの未来)"に伊藤塾長が登壇し、サステナビリティの推進における大学の役割のほか、SDGs達成に向けての新たな試みや戦略について議論しました。また、義塾での取り組み例として、APRU Asia-Pacific Women in Leadership (APWiL) Programでの経験をもとに導入した女性教員のための慶應義塾メンタリング・プログラムや慶應義塾SDGs会議について紹介しました。



| 8月22日 |

慶應義塾大学理工学部
Girls Science Club 2023 開催



理工学部のジェンダーアンパランスの解消を目的の一つとして、女子中高生とその保護者を対象に、化学実験体験と先輩女子学生やOGとの座談会、保護者と教職員の懇談会を開催しました。実際の環境で活動すること、学生と直接話をする中で、理工学部での大学生活がどのようなものか知ってもらう機会となりました。



| 9月24~25日 |

土屋常任理事
APRU Senior International
Leaders' Meeting 参加



シドニー大学で開催されたAPRU Senior International Leaders' Meeting (SILM:国際担当上席者会議)において、土屋常任理事が"Equity, Diversity and Inclusion (DEI) Initiatives at Keio University"と題した発表を行いました。慶應義塾メンタリング・プログラム、世界女性デーにメルボルン大学と共催で実施した「インターセクシュナリティ・ワークショップ」、大学におけるDEIについて情報共有や意見交換を行ったDEIシンポジウムなどの取り組みを紹介しました。

Keio SDGs News



| 10月24~25日 |

地政学リスクの下での大学のあり方
—第19回日韓ミレニアムフォーラム開催—

慶應義塾大学、早稲田大学、高麗大学、延世大学の相互の関係強化を目的とした日韓ミレニアムフォーラムを、三田キャンパスで開催しました。本フォーラムのテーマ("Roles of Higher Education for the Globalized World under Geopolitical Risks (地政学リスクの下での高等教育の役割)")に沿った各大学長の発表、代表学生による「日韓で加速する都市一極集中」「気候変動リスク」「地政学リスクと学生生活の相関関係」「地政学リスクマネジメント」などの発表と提言、研究者からの専門的見地からの発表が行われ、それぞれ活発な意見が交わされました。

| 12月4日 |

3大学連続ワークショップ
「ウクライナ復興そして未来を考える」
第3回「ルブリン・トライアングルと日本」
開催

慶應義塾大学、上智大学、東北大学の3大学による連続ワークショップ「ウクライナ復興そして未来を考える」の第3回「ルブリン・トライアングルと日本」を三田キャンパスで開催しました。ウクライナの復興とさらなる発展に焦点を当て、特に「ルブリン・トライアングル」と呼ばれるウクライナ、ポーランド、リトアニア3国の地域連合と日本がどのように連携できるかを議論しました。

| 1月15~19日 |

伊藤塾長が
2024年世界経済フォーラム年次総会
(通称ダボス会議)に参加

「信頼の再構築へ」(Rebuilding Trust)をテーマにした第54回ダボス会議において開催された、研究開発のエコシステム構築のために大学が果たす役割について話し合う世界の有力大学の学長たちによるセッション(Building Bridges: University Leaders Meeting on Research and Development Ecosystem)に伊藤塾長が参加しました。



Copyright: World Economic Forum

| 2月13日 |

30% Club Japan 9大学トップ
「多様性ある大学運営」のための
コミットメント発表

慶應義塾は、2010年にイギリスで創設された、役員に占める女性の割合の向上を目的とした世界的なキャンペーンである「30% Club」の取り組みに参加しています。伊藤塾長が、30% Club Japan 大学グループに加入している他大学のトップとともに、「多様性のある大学運営」の実現への道筋をつくることを目指し、具体的な目標を言語化したコミットメントを発表しました。